Dire le Vrai　ーギヨーム・ド・マショー『真実の物語詩』における語りの特性

辻部（藤川）　亮子

フランス中世文学の語り手はしばしば作品の冒頭や末尾に、作者としての視点、つまり作品の創作と受容に関わる顧慮を顕在化させた。たとえばクレチャン・ド・トロワは作品のスルスの由緒正しさを引き合いに出し、読者（聴衆）の信頼感を促そうとする。

Donc avra bien sauve sa peinne	よってわたくしクレチャンは力を尽くし
Crestïens, qui antant et peinne	いまだかつて宮廷で語られたことのないほどに
a rimoier le meillor conte,	優れた物語を
par le comandement le conte,	伯のお命じになるとおりに
qui soit contez an cort real:	韻律ただしく語って見せましょう。
ce est li contes del graal,	それこそ聖杯の物語、それについての
don li cuens li baille le livre,	本は伯がわたくしめに下されしもの
s'orroiz comant il s'an delivre.	クレチャンがいかに使命を果たすか、さあお聞きあれ。

(*Le Conte du Graal (Perceval)*, vv. 61-68)[1]

ジャン・ボデルはそのファブリオにおいて愚かな夫婦の笑い話を語り終える際、その情報源は当事者本人であって自分がその話をつくり上げたのではないことを、読者にわざわざ断っておく。

Mais de ce lo tieng a estot	それにしても奴は馬鹿な男、
Que l'andemain lo dist par tot,	翌日にはあちこちで言いふらし、
Tant que lo sot Johanz Bodiaus,	それをファブリオ作りのジャン・ボデルが
Uns rimoieres de flabiaus,	聞きつけたというわけだ。

(*Le Souhait des Vez*, vv.207-210)[2]

12～13 世紀の文学における語り手はこのように作品本編の外側から、語りの

[1] Éd., Félix Lecoy, Paris, Champion, C.F.M.A., 1972-1975.
[2] Éd., Willem Noomen, dans *Nouveau Recueil Complet des Fabliaux*, Pays-Bas, Assen, t.VI, 1991.

信憑性と誠実さを読者（聴衆）に訴えようとした。彼はそこで自らを三人称で指し示し、作者としてよりもむしろ、読者と共有する知識や観念の忠実な表現者・解釈者としての、謙虚な地位に引き下がってみせる。

ところが 14 世紀には、語り手が一人称で名を明かし、作者として作品に対する積極的な立場を主張しようとする動きがみられる。ギヨーム・ド・マショーはその晩年、フランス文学史上初の個人全集を編み[3]、その巻頭に『序言 *Prologue*』を付けて、詩人の使命を帯びる自らの姿をアレゴリー世界の中に演出してみせた。まず、ギヨームの前に自然の神 Nature が 3 人の子、理知 Scens、修辞 Retorique そして音楽 Musique を伴って現われ、彼に詩人としての実践力を授ける。

Je, Nature, par qui tout est fourmé	わたしは自然の神、地上海中この世の
Quanqu'a ça jus et seur terre et en mer,	全てのものを作ったこのわたしが
Vien ci a toy, Guillaume, qui fourmé	ギヨームよ、わたしが特別に創造した お前の元にやってきたのは
T'ay a part, pour faire par toy fourmer	楽しく心踊るような新しい恋の詩が
Nouviaus dis amoureus plaisans.	お前によってつくられんとするため。
Pour ce te bail ci trois de mes enfans	よってお前にわが三人の子を託そう。
Qui t'en donront la pratique,	彼らはお前に詩の実践を授けてくれよう。
Et se tu n'ies d'euls trois bien congnoissans,	もしお前が彼らのことを知らぬというなら教えよう、
Nommé sont Scens, Retorique et Musique.	それは理知、修辞、音楽という者たちである。

(*Prologue*, I, vv.1-9)[4]

次に愛の神 Amour が訪れて、詩作の材料たる 3 人の子、甘美な物思い Dous Penser、悦楽 Plaisance、希望 Esperance をギヨームに託す。

Je sui Amours qui maint cuer esbaudi	わたしは愛の神、多くの人間を楽しませ

[3] 全集の写本の多くがほぼ同じ順序で諸作品を配列していること、さらに写本Aの巻頭欄外に「これがギヨーム・ド・マショーが彼の本に望んだ配列です Vesci l'ordenance que G. de Machaut wet qu'il ait en son livre」という書き込みがあることから、ブラウンリーは作品の全集化は作者自身の監修の下に行われたであろうことを指摘している。Kevin Brownlee, *Poetic Identity in Guillaume de Machaut,* Madison, The University of Wisconsin Press, 1984.

[4] Éd., E.Hœpffner dans *Œuvres de Guillaume de Machaut*, 3 vol., Paris, Firman Didot, 1908, 1911, 1921. 以下、同作品からの引用はこの版による。

Et fai mener douce et joieuse vie.	甘美な生を送らせる者である。
Si ay oÿ, Guillaume, je te di,	よくお聞き、ギヨームよ、
Que Nature, qui tout fait par maîstrie,	万物の巧みな創造主である自然の神が、
T'a dit qu'a part t'a volu faire	わたしのことについての新しい詩を作らせるために
Pour faire dis nouviaus de mon affaire.	お前を特別に創造したと聞いた。
Pour ce t'ameinne ici en pourvëance,	お前がその使命を果たせるように、お前に詩材を与えるべく、
Pour toy donner matere a ce parfaire,	しぐさも優美なわが三人の子を
Mes trois enfans en douce contenance :	前もってお前の元に連れてきた。
C'est Dous Penser, Plaisence et Esperence.	それは甘美な物思い、悦楽、希望という者たちである。

(*Prologue*, III, vv.1-10)

ギヨームはふたりの神に感謝を捧げ、これから生み出されるであろう作品の数々のジャンルを列挙しつつ (dis et chansonnettes / Pleines d'onneur et d'amourettes, / Doubles hoquès et plaisans lais, / Motès, rondiaus et virelais / Qu'on claimme chansons baladées, / Complaintes, balades entées (*Prologue*, V., vv.11-16))、詩人としての使命感をあらたにする、というわけである。このようにして『序言』は、実践 pratique と材料 matere というふたつの本質が詩人そのひとの内部に統合される、というマショーの詩学を描き出すと同時に、彼の諸作を統括して理論的な一貫性を与え、彼の作品中における「わたし」の言説を作者ギヨーム・ド・マショーの名において読者に保証したのであった。

それでは、『序言』が体現するこのようなマショーの詩的理念は、作品中ではいかにして実践されるだろうか。本論考は、彼の最後の長編『真実の物語詩 *Le Voir Dit*』(1364～1365 年ごろ[5]) における語り手「わたし」の位相を分析し、題が示すとおりに読者に対して「真実」を主張するその手法の、中世文学における斬新さを明らかにする[6]。

---

[5] ポーラン・パリスの年代確定による。Voir Paulin Paris, « Notice sur le poëme du *Voir-Dit* » dans *Le* Livre du Voir-Dit *de Guillaume de Machaut où sont contées les amours de messire Guillaume de Machaut et de Peronnelle Dame d'Armentires avec les lettres et les réponses, les ballades, lais et rondeaux dudit Guillaume et de ladite Peronnelle*, Paris, Société des Bibliothèques François, 1875, pp.xxviii-xxxi.

[6] 以下使用する版は、Guillaume de Machaut, *Le Livre du Voir Dit*, éd., P. Imbs, revisée par J. Cerquiglini-Toulet, Paris, Lettres Gothiques, 1999.

特権的な語り手

「わたし」の元に、ある高貴な乙女からのファンレターが届き、あいまみえたことのないふたりの恋が始まる。恋人と詩材とを得た喜びと、会えない不安とのはざまに揺れ動きながら、「わたし」は乙女に詩と手紙を書き送り続ける。ついに短い逢瀬が実現し、「わたし」は彼女と結ばれるものの、その後口さがない者たちの中傷によって恋人への不信感をつのらせ、次第にこの恋に幻滅していく。『真実の物語詩』は、語り手「わたし」自身の恋の軌跡をこのようにつづったものである。作品の題材は、「わたし」の内部にあるのである。

さらに、「わたし」は「この真実の物語詩に / わたしがかのひとに対して為したり語ったりしたすべてのことがらと / かのひとがわたしに対して為したすべてのことがらを / 何ひとつ包み隠さず盛り込むつもりです Veult que je mete en ce voir dit / Tout ce qu'ai pour li fait et dit / Et tout ce qu'elle a pour moy fait, / Sans riens celer qui face au fait.」(vv.512-515) と宣言し、恋人と交わした数々の抒情詩と書簡を、語る出来事の証拠として随所で読者に提示する。その際、たとえば第 10 書簡の挿入時には「わたしはまず楽しい気分で / このバラッドを書き / そしてこの手紙に同封しました Mais ainçois fis ceste balade / De joli sentement et sade, / Et en ces lettres l'encloÿ」(vv.1622-1624)、第 23 書簡の前では「すぐさまわたしはこのような文をしたため / 恋人に送りました Je fis tantost ceste escripture / Et si l'envoiai a ma dame」(vv.4641-4642)、というふうに、抒情詩と書簡の作者がほかならぬ「わたし」であることを逐一保証してみせる。つまり「わたし」は三形態の声（8 音節韻文による語り・抒情詩・散文による書簡）を持ち[7]、現在の語りを「わたし」自身による過去の言説によって証拠立てる。

中世において、作品の内部でエクリチュールの形態を複数混交させるとき、それは多くの場合、話者の混交を意味するものであった。クリスティーヌ・ド・ピザンの『愛の神への書簡詩 *Epître d'Othéa*』では、女神の言葉が韻文で記され、それに語り手が散文で注釈を施す。ルネ・ダンジューの『恋に燃え上がる心の物語 *Livre du Cuer d'Amours Espris*』は、散文の語りとアレゴリー化された登場人物の韻文による台詞が交錯する。ここでは、話者の階級化が、

[7] 『真実の物語詩』は、我々の知る限り、3つの文学ジャンルを混交させるフランス文学史上初の作品である。Voir Jacqueline Cerquiglini, « Éthique de la Totalisation et esthétique de la rupture dans le *Voir Dit* de Guillaume de Machaut », dans *Guilaume de Machaut, poète et compositeur*, Actes et colloques no.23, Paris, Klincksieck, 1982, pp.253-262.

声の形態の差異化によってなされるのがみてとれる。また、ジャン・ルナールの『ギヨーム・ド・ドール物語 *Roman de la Rose ou de Guillaume de Dole*』では、語り手が８音節の韻文でもって皇帝と騎士の妹との恋物語を進める中、登場人物が代わるがわる抒情詩を詠う。

Une dame s'est avanciee,	赤いドレスを着たひとりの
vestue d'une cote en graine,	ご婦人がついと進み出て、
si chante ceste premeraine:	まずはこのように歌います：
C'est tot la gieus, enmi les prez,	ほらほらそこに野の中に
Vos ne sentez mie les maus d'amer!	あなたは恋の苦しみを感じてはいらっしゃるまい
Dames i vont por caroler,	貴婦人たちが踊りに出かける
remirez voz braz!	あなたの腕を御覧なさい！
Vos ne sentez mie les maus d'amer	あなたは恋の苦しみを感じてはいらっしゃるまい
si com ge faz!	わたしほどには！
Uns vallez au prevost d'Espire	今度はエスピールのお奉行さまの若者が
redit ceste, qui n'est pas pire:	これまたあっぱれな歌いっぷり：
C'est la jus desoz l'olive,	ほらオリーヴの木のもとに
Robins enmaine s'amie.	ロバンが恋人を連れ出した
La fontaine i sort serie	泉が清らかにわき出でる
desouz l'olivete.	オリーヴの木のもとに
E non Deu! Robins enmaine	神様の名にかけて、ロバンは連れ出すよ
bele Mariete.	可愛いマリエットを！

(*Roman de la Rose ou de Guillaume de Dole*, vv.511-527)[8]

一方、『真実の物語詩』のようにひとりの語り手が複数の文学的形態を支配する作品も、例は少ないけれども確かに存在する。しかし、これらの作品における韻文と散文の交替は、単なる声のヴァリエーションでしかない[9]。たとえばリュトブフの『薬売りのよた話 *Dit de l'Herberie*』では、いかがわしい薬を売りつける男の客寄せ文句が、前半は韻文で、後半が散文で繰り返される。同様に、歌物語『オーカッサンとニコレット *Aucassin et Nicolette*』の第６、第７場面、オーカッサンが恋人ニコレットを奪われるくだりにおいて、散文

[8] Éd., Félix Lecoy, Paris, Champion, C.F.M.A., 1979.

[9] このような特徴は、ジョングルールの聴衆に対するパフォーマンスを伝え、中世における作品の口頭性を物語る。Voir Mario Roques, « Introduction » dans *Aucassain et Nicolette, Chantefable du XIIIe siècle*, éd., Mario Roques, 2e édition, Paris, Champion, C.F.M.A., 1982, p.v.

から韻文へ移行しても同じ次元でストーリーが進行するのがわかる。

- Ce poise moi ≫, fait Aucassins; se se depart del visconte dolans.
「なんと気の重いこと！」オーカッサンはそう言って、悲嘆にくれた様子で子爵のもとを去ります。

VII. OR SE CANTE.	第７場面　歌
Aucasins s'en est tornés	オーカッサンは戻っていった、
molt dolans et abosmés:	悲しみに打ちひしがれて。
de s'amie o le vis cler	美しい面差しの恋人のことで
nus ne le puet conforter,	力づけてくれる者とてなく、
ne nul bon consel doner.	助言を与えてくれる者もない。
Vers le palais est alés;	王宮のほうへ足が向かい、
il en monta les degrés,	階段を上ると
en une canbre est entrés[10],	ある部屋へ入っていった。

これに対し『真実の物語詩』では、「わたし」の３つのかたちの言説は互いが互いの根拠として機能している。抒情詩と散文による書簡は、８音節韻文による語りを物的に証明し、また語りの部分は、単独でも存在できる抒情詩[11]に文脈をつけることによって恋の抒情を裏付けるのである[12]。作品の材料と技法を一手に引き受け、さらに自分の言説がそれ自体保証となる、このような特権的な「わたし」によって、真実の恋物語は語られる。

舞台のリアリティ

中世文学は恋を好んで題材に扱ったが、語り手自身の恋語りとなると、たとえばトゥルヴェールの宮廷風恋愛詩やギヨーム・ド・ロリスの『薔薇物語』など、夢やアレゴリー、象徴の装置を用いた恋の抽象化・一般化に向かい、打ち明け話には程遠く、むしろ恋愛の理論とみなす方がふさわしい。「わたし」

---

[10] *Aucassain et Nicolette, Ibid.*, pp.6-7.

[11] 実際、『真実の物語詩』におけるいくつかの抒情詩は、ギヨーム・ド・マショーの詩集『貴婦人方の賛美 *Louange des Dames*』に個別的に収められている。Voir *Poésies Lyriques, édition complète en deux parties, avec introduction glossaire et fac-similés*, éd., Vladimir Chichmaref, Genève, Slatkine, 1973.

[12] J.セルキリーニは、『真実の物語詩』における抒情詩は語りの部分に「挿入される」のではなく、「語りの部分を生み出す母体 fondatrice du texte」であることを指摘する。さらにこのようなタイプのジャンルの混交を「モンタージュ型」として、『ギヨーム・ド・ドール物語』の「コラージュ型」との対立において定義する。Voir « Insertion Lyriques » dans *Perspective Médiévale*, no.3, 1997, pp.7-31, et « Le jeu des formes » dans *« Un engin si soutil » Guillaume de Machaut et l'écriture au XIVe siècle*, Paris, Champion, 1985.

は普遍的な「恋する者」にとどまり、自伝的要素を介入させることがない。冒頭に表れる春の情景、すなわち歌う鳥たちや緑豊かな果樹園の描写も、「わたし」のいる時間と空間を客観的に示すのではなく、恋をしていることの記号として働き、諸作の様相を没個性化する。

Li noviaus tens et mais [et violete]	新しい季節、皐月、すみれの花が
et roissignox me semont de chanter;	そして夜啼鳥がわたしに歌えと誘う。
et mes fins cuers me fet d'une amorete	わたしの誠実なる心は、断ることもかなわぬほどの
un doz present que ge n'os refuser.	甘美な恋の贈り物をわたしにもたらす。
Or m'en doint Dex en tel honor monter,	神よ、わたしに誉れを与えたまえ、
cele ou j'ai mis mon cuer et mon penser	身も心も捧げるかのひとの
q'entre mes bras la tenisse nuete	裸身をこの腕に抱けますように。
ainz q'alasse outremer.	わたしが海を越えて行く前に。

(Châtelain de Coucy, Raynaud 985, vv.1-7)[13]

Avis m'iere qu'il estoit mais,	あれは皐月のころだったか、
il a ja bien .V. anz ou mais,	もう五年以上も前のこと、
qu'en may estoie, ce sonjoie,	わたしは皐月の季節にいる夢を見た。
el tens enmoreus, plain de joie,	それは喜びに満ち溢れる恋の季節、
el tens ou toute rien s'esgaie,	すべてのものが陽気になる季節。
que l'en ne voit buisson ne haie	皐月に新しい葉でその身を飾ろうとしない
qui en may parer ne se veille	茂みや垣根は
et covrir de novele fuelle.	ありはしない、そんな季節である。

(Guillaume de Lorris, *Le Roman de la Rose*, vv.45-52)[14]

しかしそのような常春の恋の園は、『真実の物語詩』において、より現実味ある時空の流れの中に置き換えられる。盛夏の「太陽の強い日差し la chaleur dou soleil 」(v.55) のころ初めて乙女からの使者が訪れ、その後２回書簡が往復したきり２ヶ月も乙女から返事が来ない「天気がとても悪く / あまりにつらい冬 Si m'estoit li temps moult divers / Et s'estoit trop grans li yvers」(vv.635-636) を「わたし」は過ごす。「美しく陽気な春が到来し Li printemps vint biaus et jolis」(v.1107) 「ちょうど４月に Ce fu tout droit en mois d'avril」(v.1123) 恋人との逢瀬の機運が高まり、その旅先、「わたしは確かにクレシ

[13] Hans von Spanke, *G. Raynauds Bibliographie des Alteranösischen Liedes*, Leiden, E.J.Brill, 1955.

[14] Éd., Felix Lecoy, Paris, Champion, C.F.M.A., 3 vol., 1965-1970. 以下、同作品からの引用はこの版による。

一の町で / この手紙（第 18 書簡）を受け取った Je reçus ceste lettre cy / Droit en la ville de Crecy」(vv.3359-3360)。会合を果たしたふたりは、「サン・ドゥニへ a saint Denis」(v.3557) 巡礼の小旅行に行き、「パリで皆がラ・シャペルと呼ぶ町で A une ville qu'on appelle / Par tout a Paris La Chapelle」(vv.3615-3616) 遊んだ夜に、ひとつのベッドで抱き合って眠る。このように季節の移り変わりや地名の明示によって、読者は「わたし」の恋の展開をリアルな時と場所にたどってゆける。さらに、恋人たちが結ばれた後に交わした第 27 書簡と第 28 書簡からは、「８月８日、あなたを忠実に愛する男より Escript le .VIIIe. jour d'aoust. Vostre loial ami」、「８月中旬前の日曜日、あなたを忠実に愛する女より Escript le digmenche devant la miaoust. Vostre loial amie」というふうに日付が始まり、恋人の不実を讒言されるきっかけとなった第 39 書簡の「11 月 13 日 Escript le .XIIIe. jour de novembre」を経て、恋の終焉を暗示する第 45 書簡の「4 月 10 日 Escript le .X^{e}. jour d'avril」まで、「わたし」の語る個々の出来事は客観的な時間軸の中に特定される。

「わたし」の同定

また、作品は語り手「わたし」個人の具体的な情報にも満ちており[15]、抽象的な恋語りの主体を限定しようとする。たとえば詩人が恋人に宛てた第 27 書簡と第 35 書簡からは、「わたし」がランス在住であることが示唆される。

> Et ma tresdouce suer, je vous pri trop a certes que vous et vostre suer promettés la voie a saint Nichaise de Reims pour vous et pour ses enfans, et je vous promet, par ma foi, que je vous irai querre a la porte saint Anthoine ; (Lettre XXVII (i))
> いとしいひとよ、あなたとあなたの妹御がランスの聖ニケーズ司教のもとへご出立になり、あなたがたと彼の子供たちのために祈られんことを、心からお願

[15] 作品にはこのような特徴に加え、ギヨーム・ド・ロリスの『薔薇物語』の明らかな影響を受けたアレゴリーの人物を登場させる箇所がある。ゆえに 19 世紀以来、題名にかかげられた「真実」の一語をめぐって、作品が作者ギヨーム・ド・マショーの自伝として定義されるか否かという点において、を議論されてきた。近年では、虚構であるとの立場を取るものとして、たとえば William Calin, « Le Moi chez Guillaume de Machaut » dans *Guilaume de Machaut, poète et compositeur, op.cit.*, pp.241-252, Paul Zumthor, « Le *je* de la chanson et le moi du poète chez les premiers trouvères 1180-1220 » dans *Canadian Review of Comparative Literature*, 1974, pp.9-21 がある。一方、E. エプネルや J.セルキリーニは、作品の独創性と魅力は虚構と現実性の曖昧さにあるとし、「真実」の問題性を自伝以外の次元に見出そうとする態度を取っている。Voir E. Hœpffner, *Œuvres de Guillaume de Machaut*, *op.cit.*, p.II, et J. Cerquiglini-Toulet, « Introduction » dans *Le Livre du Voir Dit, op.cit.*, p.10.

い申し上げる。わたしは必ずや、あなたがたを聖アントワーヌ門のところまでお迎えにあがりましょう。

Mon tresdoulz cuer, je vous envoie le chant du rondel ou vostre nons est. Et a couvenu par force que je l'aie baillié ailleurs avant que a vous, car li estranges qui estoient a Reims ne m'en laissoient en paix. (Lettre XXXV (f))
いとしいひとよ、あなたの名前が入ったロンドーにつけた曲を、あなたに送ります。しかしそれをあなたに捧げる前によその人たちに見せてしまわなくてはならなかった。というのは、ランスに滞在している異国の方々が、わたしにうるさくせがんだからなのです。

第33書簡、そして第35書簡は第37書簡とともに、「わたし」と交友関係にある人物を浮上させる。

plaise vous savoir que j'ai esté si embsongné de faire vostre livre, et sui encores, et aussi des gens du roy et de Monsigneur le duc de Bar, qui a geu en ma maison, que je n'ai peu entendre a autre chose. (Lettre XXXIII (e))
どうかお聞きください、わたしはあなたの本の創作に忙しくしておりましたし、また今でもそうしておりますものの、うちに滞在していた王宮の者たちやバール伯殿のお相手にも忙しく、他のことがらに手が回らないほどです。

je pense estre a ceste Toussains a Saint Quentin, et de la aler vers Monsineur le duc. (Lettre XXXV (i))
次の万聖節にはわたしはサン・カンタンにおりまして、伯殿を訪ねるつもりです。

「わたし」の職業に関しての手がかりには、作品の冒頭から事欠かない。「わたし」は詩人、それも世間に名の知れた詩人であることが、乙女からのメッセージを伝える使者の言葉から読者はうかがい知ることができる。

On li a dit et raconté	あなた様がひと冬ずっと、さらに夏まで
C'un yver et pres d'un esté	ひどくご病気でいらっしゃり、
Avéz esté griëment malades,	それにもかかわらずバラッド
Et que toudis faisiés balades,	ロンドー、モテトにヴィルレー、
Rondiaus, motés et virelais,	嘆きの詩や恋のレーをお書きになっていると
Complaintes et amoureus lais,	姫様に申し上げた者がおりまして、
Dont elle dit que c'est trop fort	なんとまあ大変なことか、
D'avoir en un cuer tel confort	病と闘いながらも
Qu'il soit chargiez de maladie	楽しいことを考えなくてはならないとは、

Et qu'avoir puist pensee lie. とおっしゃいました。
Et vraiment trop fort li poise 実に姫様はあなたのお苦しみを思うにつけ
De vostre anuy quant bien le poise. 心を痛めておられます。

(vv.143-154)

第 5 書簡と第 6 書簡においては、乙女が「わたし」に自作詩の添削を乞い、それを「わたし」が評価する、というやり取りがある。

sur l'autre chanson baladee, je en ai fait une autre (.....) si vous pri que vous y vuilliez amender ce qui y sera a amender. (Lettre V (e))
あるバラッドに触発されて、わたしは自分で別のバラッドを作ってみました。（中略）そこでお願いなのですが、もし改善の余地がありましたらそれを直していただけないでしょうか。

Les .II. choses que vous m'avés envoïes sont tresbien faites a mon gré ; mais, se j'estoie .I. jour aveuc vous, je vous diroie et apenroie ce que je n'apris onques a creature, par quoy vous les feriés mieulz. (Lettre VI (f))
あなたがわたしにお送りになったふたつの作品は、大変よろしくわたし好みの出来栄えです。とはいえ、もしいつかあなたとご一緒する日があれば、わたしが誰にも教えていない秘訣をあなたにお教えしましょう。そうすることで、あなたの作品はより良いものになるでしょう。

さらに、「わたし」の著作物が書簡においてしばしば言及される。

Je vous fais escrire l'un de mes livres que j'ai fait derrainement, que on appelle *Morpheus* (Lettre IV (f))
わたしはあなたのために、『モルフェウス』とよばれるわたしの新作を写本させましょう。

Je vous envoie mon livre de *Morpheus*, que on appelle *La Fontaine Amoureuse*, aveuc *Le grant desir que j'ai de vous veoir*, ou j'ai fait un chant a vostre commandement ; (Lettre X (c))
わたしはあなたに、『愛の泉』とも呼ばれる『モルフェウス』というわたしの本をお送りしましょう。それに添えて、『あなたにお会いしたいこの大きな望み』の詩に、お望みどおり曲をつけておきました。

このように『真実の物語詩』は、地名や日付とともに語りの行為の周辺にある情報を提供するのみならず、ふたりの恋人たちの名前を読者に明かして決定的に「わたし」を限定しようとする。まず、第 35 書簡によれば、同書簡

に添えられたロンドーは乙女の名前を隠したものであるという。

Dix et sept, .V., .XIII., .XIIII. et quinse	「17、5、13、14、15」このひとが
M'a doucement de bien amer esprïs ;	わたしを優しく愛の炎で燃え上がらせた。
	(vv.6263-6264)

数をアルファベットの順番（Kを除く）に置き換えると、「R(17), E (5), N (13), O (14), P (15) 」が得られ、さらに「N」と「E」を重ねると「PERONNE」という女性の名前が浮かび上がる[16]。この,ロンドーの対をなす恋人のロンドーには、今度は「わたし」の名前が記されていることになる。

Cinc, .VII., .XII., .I., .IX., et .XX.	「5、7、12、1、9、20」この方が
M'a de tresfine amour esprise ;	いとも誠実なる恋でわたしに火をつけた。
	(vv.8958-8959)

同様のやりかたで「E, G, M, A, I, L, U」が示され、「E」と「L」を重ねて「GUILLAUME」となる。これらの名前は、「わたし」がわざわざ読者を案内するもうひとつのアナグラム、すなわち 9001 行目すべてと 9002 行目の最初の８文字（「Pour li changier nulle autre fame. / Ma dame le」）によって得られる「Guillaume de Machaut」と「Peronelle d'Armentiere」に一致し[17]、読者はさらなる確信感を与えられるというわけである。名前を隠すためのアナグラムも、ここでは見せるためのそれである。

Or est raison que je vous die	さてここで、わたしが美しい恋人の名と
Le nom de ma dame jolie	『真実の物語詩』と呼ばれるべきこの作品をつくった

[16] J.セルキリーニはこのアルファベット列の解読に関して、「Peronne」という固有名詞ではなく、「non per（比類なきお方)」やトゥルバドゥールらが恋人への敬語として用いていた「personne」の可能性があることを示唆している。Voir J. Cerquiglini, « *Un engin si soutil* », *op.cit.*, pp.228-229.

[17] ポーラン・パリスの解読による。乙女の名を「Peronne(lle)」と決定することに当たってパリスは、マショーの弟子ユスターシュ・デシャンが師の死を受けて書いたバラッド中に、次のようにこの女性の名前がみられることを指摘している。「あなたを愛したマショーの後 / （中略）/ 死んだ彼への愛ゆえに / どうかわたしがあなたの恋人になることをお許しください。/ (中略) / わたしはユスターシュという名前です / 我が救い、ペロンヌよ！(Après Machaut qui tant vous a aimé / (.....) / Veuillez, lui mort, pour l'amour de celui, / Que je soie vostre loial ami. / (.....) / Eustace suis par droit nom apellé : / Hé Peronne ! qui estes mes secours) 」Voir Paulin Paris, « Notice sur le poëme du *Voir-Dit* » dans *Le* Livre du Voir-Dit *de Guillaume de Machaut, op.cit.*, pp.xx-xxvii.

Et le mien qui ai fait ce dit	このわたしの名を
Que l'en appelle *Le Voir Dit*.	あなた方に申し上げてもいいでしょう。
Et se au savoir volés entendre,	もしそれを知りたいとお望みなら
En la fin de ce livre prendre	この本の最後から９行目と
Vous couvenra le ver .IXe.	そして８行目にある
Et puis .VIII. lettres de l'uittime	最初の８文字とを
Qui sont droit au commencement :	とってみてごらんください。
La verrés nos noms clerement.	そこでわたしたちの名をはっきりご覧になれましょう。

(vv.8986-8995)

この箇所で作品を『真実の物語詩』と題することからうかがえるように、名前は語られる内容の責任を特定の「わたし」に負わせる意義を持っている。また、名前をはじめとして「わたし」とその恋人の同定に関するさまざまな傍証を読者に与えることが、中世の恋の文学におけるタブーであることを逆手に取るかたちで、「わたし」は読者に言説の真実性を信じよと要求するのである。

Et se j'ai dit ou trop ou pau,	もし言い過ぎのところや言い足りないことがあっても
Pas ne mespren, car, par saint Pau,	わたしはあえて意に介しません。というのは、聖パウロにかけて、
Ma dame vueult qu'ainsi le face	恋人のご不興を買う覚悟でわたしがそのようにすることを、
Soubz pene de perdre sa grace.	愛するわたしの恋人ご自身がお望みだから。

(vv.4142-4145)

「わたし」の外在

物語中において作家として現れる「わたし」は、「あなたの本 vostre livre」と示される、ある本の執筆中である。第 27 書簡によれば、「あなたの本」は「あなた」、すなわち恋人との逢瀬が実現した直後に執筆が開始された。

> Je vous envoie une balade qui fu faite au bout du mois que je me parti de vous et puis commençai vostre livre. (Lettre XXVII (i))
> わたしはあなたにバラッドを一編お送りしますが、それはわたしが先日あなたのもとをおいとましてから作ったものです。あなたの本はそれから書き始めました。

恋人の愛を確信しているこの時点で、「わたし」の筆が進む様子が嬉々として報告される。

> Vostre livres se fait et bien avanciés, car j'en fai tous les jours .C. vers ; et, par m'ame, je ne porroie tenir du faire, tant me plaist la matiere, et pour ce que je sai bien que vous le verriés tresvolontiers. (Lettre XXVII (f))
>
> あなたの本はどんどん進んでいます。というのは、毎日 100 行も書いたからです。そして、誓って言いますが、書かずにはいられない。それほど本の題材がわたしを喜ばせるのです。またあなたが,その本を読んでお喜びになるでしょうから。

一方、恋人の不実が噂されるころ書かれた第 30 書簡には、「あなたの本」の創作意欲をすっかり失っている「わたし」を垣間見ることができる。

> j'ay fait pour amour de vous depuis la Magdelaine ce que je ne cuidoie mie faire en un an (.....). Mais puis que matere me faut, il me couvient laisser euvre. (Lettre XXX (c))
>
> 聖マグダラ祭のころ以来、わたしはあなたへの愛につき動かされて、一年でも書けまいと思うほどの量を書きました。(中略) しかし本の題材が欠けてしまった今や、筆を止めざるを得なくなっています。

第 27 書簡と第 35 書簡は、その本の中に、「わたし」と恋人の書簡が挿入されることを物語る。

> j'ai trop a faire a querrir les lettres qui respondent les unes aus autres ; si vous pri qu'en toutes les lettres que vous m'envoierés d'ores en avent il y ait date, sans nommer le lieu. (Lettre XXVII (f))
>
> わたしは、書簡の往復関係を整理するのに苦労しています。そこで、今後わたしにお送りくださるお手紙に日付をお入れ願いたい。場所は伏せておいて構いません。

> Et sachiés que il n'i fait mais a mettre que les lettres que vous m'avés envoiees et je a vous puis que vous partistes ; renvoiés moi la lettre que je vous envoiai darreinement. (Lettre XXXV (b))
>
> あなたの本の完成は残すところ、あなたがご出立された後に交わした手紙を入れるのみになりました。つきましては、わたしがあなたに先日お送りしたお手紙をご返送ください。

さらに、第 35 書簡に添えて「あなたの本」を恋人に見せることになったが、

それはまだ未完成である。

> Si vous pri, si chierement comme je puis et sai, que vous le veuilliés bien garder et vous le me veuilliés renvoier quand vous l'arés leu, par quoy je le puisse parfaire.
>
> (Lettre XXXV (b)).
>
> 最上の親愛をこめてお願いしますが、お送りする本をしっかりご管理の上、お読みになったあかつきにわたしの方へお返しください。それからわたしはその本の仕上げをしましょう。

恋人への情熱を喪失してしまった「わたし」は、久しぶりの書簡である第45書簡を恋人に書くのであるが、そこでは「あなたの本」の完成が予告される。

> Et quant a vostre livre, il sera parfais, se Dieu plaist et je puis, dedens .XV. jours ; et se fust piece ha, mais j'ai esté long temps que je n'i hai riens fait ; et tenra environ .XII. coiers de .XL. poins.
>
> (Lettre XLV (j))
>
> あなたの本に関しましては、もし神の御心ならば、そしてわたしができるならば、あと 2 週間ほどで出来上がりましょう。もっと早くに出来上がるはずでしたが、長いこと手を付けずにいたものですから。本は一頁 40 行の冊子 12 冊くらいになるでしょう。

このように「あなたの本」の創作過程が報告されゆく中で、読者はその本が、自分が手にしているまさに『真実の物語詩』のことを指していることに気づかされる。8月8日付の第27書簡にある「あなたの本」の執筆開始は、「あれは一年も前のことではありませんが Il n'a pas un an que j'estoie」(v.47) という『真実の物語詩』の始まりに一致するのであるし、「あなたの本」が扱うのは「あなた」との恋であることが、第27、30、45書簡からうかがえる。そして、「わたし」がその作品に挿入したいという恋人と「わたし」との手紙は、読者が今読んでいる『真実の物語詩』中の書簡に他ならない。『真実の物語詩』はかくして、物語中の人物がその物語を書いているという入れ子構造を持っているのである[18]。さらに「あなたの本」の完成時のフォーマットが

---

[18] このように『真実の物語詩』には「物語の筋立てと、本としての作品の製作との間に、メビウスの輪のような相関関係 a Möbius reflexivity between the plot and the confection of the wort as a book」(Laurence de Looze, *Pseudo-Autobiography in the Fourteenth Century*, University of Press of Florida, 1997, p.89) があり、エクリチュールが成立するのは愛という題材が真実であるからである、というトゥルヴェール以来の詩的概念、すなわち「chanter = aimer」の循環 (Voir Paul Zumthor, « De la circularité du chant (à propos des trouvères des XIIe et XIIIe siècles) » dans *Poétique*, no.2, 1970, pp.129-140) を、ここでもみてとることができよう。

指定される第45書簡は、作品を料紙とインクによって構成される物体、すなわち読者の手元にある「本」として浮き上がらせる。「あなたの本」は読者がその実在を保証する。「わたし」はその作者、つまり読者と同じ次元に存在する人物であることを、こうして読者を使って知らしめる。同様に、「わたし」は自分の著作『愛の泉 *La Fontaine Amoureuse*』を直接読者に向けて参照を促し、その作品が、そしてその作者である「わたし」自身が『真実の物語詩』の外側に存在することを、証明させるのである。

Qui ne scet qui est Morpheüs,	モルフェウスとは誰かご存じない方がいれば、
Dont longuement me sui teüs,	(わたしはそのことについて長いこと触れずにいたのですが)
Lise l'*Amoureuse Fontaine*,	『愛の泉』をお読みくださいますよう。
Si le sara a po de paine.	そうすれば難なくお分かりになれましょう。

(vv.8125-8128)

恋人像の脱記号化

「わたし」は自分が実在する、と主張する。しかしながら、「わたし」自身の表象は全くの客観性のうちになされているとはいえない。というのは、彼は常に卑下のトポスにおいて現れ、教化文学において造形される自己の姿と大きな類似を示すからである。たとえば、『真実の物語詩』における「わたし」はしばしば自分の「粗野さ」を繰り返し、語りの部分では読者に、書簡では恋人に向けて自分を貶めてみせる。

Ainsi fu comme dit vous ay,	こうしてあなた方に申し上げたように
Et lors ma pensee arrousay	喜びと陽気さと
De plaisance et de gaietté	全くの歓喜でもって
Et de toute jolieté,	わたしの考えは洗われておりまして、
Et mis cuer et corps et estude,	この身も心も関心ごともすべて、
Comment qu'ils soient assez rude,	どんなにそれらが粗野なものであろうとも、
En ma douce dame honnourer,	わたしのいとしい恋人をあがめ、服し、愛し、たたえることに
Servir, amer et aourer ;	注いでいたのです。

(vv.806-813)

Et comment que je sache certainement que plusieurs vous ont dit que je sui lais, rudes et mal gracieus, par Dieu, com petis que je soie, j'ai bien vaillant .I. cuer d'ami.

(Lettre X (a))

わたしが醜く、粗雑で優美さに欠いた者だと皆があなたに言っていることは承知しておりますが、しかし神かけて、わたしがどんなにささいな存在でありましょうとも、恋人として十分に価する真心は持っているつもりです。

そのような「粗野なわたし」は、位相においても用いられる語彙においても中世文学における自己のモチーフのひとつであり、たとえばリュトブフが自嘲を込めてそのペンネームにしている。

Que hom m'apele Rutebuef,	ひとは俺をリュトブフと呼ぶ。
Qui est dit de 'rude' et de 'buef'.	「粗暴な」「牛」だというわけだ。

(*La Lection d'Ypocrisie et d'Unilité*, vv.45-46)[19]

Je sui droiz foux d'ancecerie :	俺はもともと馬鹿なのだ、
Bien pert a l'uevre.	行いみても、よくわかる。
Or dirat on que mal ce cuevre	それで皆は俺のことをこう言うだろう、
Rutebuez qui rudement huevre :	あいつは粗野な、リュトブフと。

(*Li Mariages Rutebuef*, vv.42-45)

また、「わたし」は分別を欠いた人生に迷える愚者として引き下がって見せるのであるが、おそらくその意味で言及される「わたし」の失明も、リュトブフのそれと合致する。

et se vos doulz cuers s'acorde a vos douces paroles, vous vous penriés bien de prés de demourer ; et aussi s'il vous souvenoit bien de vostre borgne vallet. (Lettre XIII (b))

もしあなたの優しい御心が優しいその言葉と同じならば、そして目の悪いあなたのしもべのことをあなたが時々思い出してくださるならば、どうかおとどまりくださいますようお願い申し上げる。

De l'ueil destre, dont miex veoie,	右目は昔よく見えていた方だったのに
Ne voi ge pas aleir la voie,	今では道を歩いてどこかへ行こうにも
Ne moi conduire.	見えやしない。
Ci at doleur dolente et dure,	あるのは辛く厳しい苦しみだけ。
Qu'endroit meidi m'est nuit oscure	昼間も俺にとっては真っ暗な夜、
De celui eul.	こんな目では。

(*La Complainte Rutebeuf*, vv.23-28)

---

[19] Éd., Michel Zink, dans Rutebeuf, *Œuvres complètes*, 2 vol., Paris, Bordas, 1989. 以下、同詩人の作品の引用はこの版による。

かくして「わたし」は謙虚のトポスによって恋人の地位を高め、この恋を美化しようとするのであるが、それは同時に伝統的な恋の主人公の理想的ステータスから逸脱することでもあった。恋する者の資格、すなわち「猛者ヘクトールの勇敢さ / ソロモンの知力 / アレクサンドル王の寛大さ / 皇帝ネロの絶大な富 / アブサロムの見目麗しさ / ダビデ王の誠実 / アジャクスの武勲 / 思うがままの若さ la vaillance / De Hector le fort, et la science / De Salemon, et la largesse / D'Alixandre, et la grant richesse / De Noiron, et la grant biauté / D'Absalon, et la loiauté / Du roy David qui fu loiaus, / Et la proesce dë Ayaus, / Et la jeunesce a ta volonté」(vv.2134-2142)とは対照をなすようにして、「小さい人間で粗野で愚かで野暮で、知性も勇敢さも善良さも美しさももちあわせていないわたし je sui petie, rudes et nyces et desapris, ne en moi n'a scens, vaillance, bonté ne biauté (Lettre VI (c))」[20]が自分の恋を語るのである。実際、中世の恋愛物語における語り手は主人公の紹介から物語を導入し、そこで必ず、彼の若さ、美しさ、勇敢さといった美徳の羅列を行った。また『薔薇物語』においても、語り手は夢をみた当時自分が二十歳であったことを宣言して、夢の叙述を始めた。

El vintieme an de mon aage,	二十歳の歳、
el point qu'Amors prent le paage	愛の神が若者から通行料を取り立てる
des jones genz, couchier m'aloie	この歳のある夜、いつものように
une nuit, si con je souloie,	わたしは床につき、
et me dormoie mout forment,	ぐっすりと眠っていた。
et vi un songe en mon dormant	そして眠りの中で夢を見たのだが
qui mout fu biaus et mout me plot;	それはたいそう美しく、わたしを喜ばせるものだった。

[20] J.セルキリーニは、「14 世紀において聖職者は恋を書き、騎士は恋をする Le clerc écrit d'amour au XIVe siècle et le chevalier aime」とし、社会的な階層間の対立が文学における人物表象の方向性に強く表れていることを指摘している。たとえば、マショーの『愛の泉 *La Fontaine Amoureuse*』や『ボヘミア公のお裁き *Jugement du Roy de Behaingne*』では、恋する騎士が悲嘆にくれる様子を聖職者である「わたし」が目撃し、姿を隠しながらそれを書き留める。つまり、恋は騎士や王侯の属性であり、対して聖職者（作家）の姿は彼らの恋を観察する目や耳や手によって特徴付けられ、さらに臆病さや粗野さといった、騎士とは正反対の属性において表象される。『真実の物語詩』における「わたし」も、先に引いたリュトブフの箇所とともに、後者に属するものとして言及されている。Voir J. Cerquigilini, *« Un engin si soutil »*, *op.cit.*, pp.107-138, et « Tension sociale et tension d'écriture au XIVème siècle : les dits de Guillaume de Machaut » dans *Littérature et société au Moyen Age*, Actes du Colloque des 5 et 6 mai 1978, Champion, Paris, pp.111-129.

(Guillaume de Lorris, *Le Roman de la Rose*, vv..21-27)

翻って言うならば作品の冒頭に表れる若さのテーマは、それを適用された人物がこれから恋をすること、作品が恋物語であることを、読者（聴衆）に予告する機能を持っていたのである。一方『真実の物語詩』の冒頭において、「わたし」は病や身体の衰弱、性的不能といったむしろ老人の表象において現れ、恋から遠ざかった者が恋をする、という意外性の中で物語が始まる。

Amour ne m'amoit ne je li,	愛の神もわたしも互いを愛していなかった。
Ainçois ressambloie a celi	むしろ、深い沼にはまりこみ、
Qu'on compere a une viez souche	水にすっぽりかぶさって
Qui en un grant marés se couche	役に立てることもできず
Et qui dou marés si se cuevre	かといって水のせいで
Que nulz ne la puet mettre en oeuvre,	そこから引き抜くこともできない、
N'on ne la puet tirer de la	そんな古い切り株にたとえられるような
Pour l'yaue qui couverte l'a.	男にわたしは似ていた。

(vv.842-849)

quar je estoie assourdis, arudis, mus et impotens, par quoy Joie m'avoie de tous poins guerpy et mis en oubly. (Lettre II (a))
実のところわたしは耳も悪く、頭も呆けて口もきけず、不能者でありましたので、恋の悦びの神もわたしをすっかり見捨ててお忘れになっていたほどでした。

このように『真実の物語詩』における「わたし」はクリシェ化した「恋する者」であることを否定し、語る恋を逸話化することによって、逆説的に真実を読者に訴えかける。

結び

中世の読者に一個人の恋の逸話を差し出すことに、どのような意義があったろうか。体験談はそれ自体として読者に受け入れられたのだろうか。いや、中世においてそれはむしろ普遍的な真理の中に位置づけられるべきものであった。実際『真実の物語詩』における「わたし」は、ところどころで話を中断しては読者に向かって一般論を展開してみせる。たとえば、ふた月に渡る恋人の沈黙に身も心も憔悴しきった「わたし」（vv.615-720）が、待望の第3書簡によってふたたび健康を取り戻す箇所（vv.740-879）において、「ここで女性というものが男性にどのような影響を及ぼすのか考えてみましょう Or

pensons que les dames font」(v.880) と読者は呼びかけられ、恋人の言葉やしぐさのひとつひとつによって男の心がいかに救われるものであるかが説かれる (vv. 882-933)。ラ・シャペルの旅籠で恋人と抱き合い、一線を越えることなく過ごした夜のことを語り終えたとき(vv.3625-3724) は、「というわけでここで恩寵とは何か / 少し話してみたいと思います Pour ce veil un po parler ci / Quelle chose c'est merci」(vv.3725-3726) と脱線を宣言し、いくつか例を出した上で、男たるものは恋人に欲望のすべてを強要することなく満足するべしと結論する。

Et quant a chascun d'eulz souffist	これらの男たちがすべて、恋人が
Sans desirer autre profit,	同意する以上のものを望まぬとすれば、
Je di que vraie souffisance	そのように愛の神の思し召しに満足することこそ、
D'Amours est mercy, sans doubtance.	恩寵というものでありましょう。

(vv.3759-3762)

一個人の体験はこうして、より一般的な事象の中に組み込まれようとする。「わたし」の逸話は読者を教え諭すための具体例として、積極的な意義を持っているのである。しかしまた一方で、われわれがみてきたような「真実」を主張するやり方は、伝統の要請と読者の説得が作者の自我とせめぎ合うありさまを浮き彫りにした。『真実の物語詩』は、中世文学において、作者がその個人性をそれ自体真実として読者に受け入れさせてゆく気運を示し、15 世紀のフランソワ・ヴィヨンの到来を予感させる作品として、位置づけることができるであろう。